



TITLE:

溫飛卿の文學

AUTHOR(S):

村上, 哲見

---

CITATION:

村上, 哲見. 溫飛卿の文學. 中國文學報 1956, 5: 19-40

ISSUE DATE:

1956-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/176641>

RIGHT:

## 溫飛卿の文學

村上 哲見

京都大學

### I

溫飛卿——名は庭筠（廷筠・庭雲。又の名は岐）——は李義山商隱と名を齊しくする晚唐の詩人である。當時すでに「溫李」の稱があり、

與李商隱皆有名、號溫李。（新唐書傳、東觀奏記、北夢瑣言、唐語林）。

この二人は晚唐詩人の双璧として常に併稱されるが、その人物作風を比べるなら共通性はむしろ乏しく、對照的な面がかえつて多い。彼らの詩の高下について、清初の優れた詩人・評論家である王漁洋士禎は「溫李名を齊しくす。然れども溫は實は李に及ばず」花草蒙拾と斷言し、森槐南博士も「晚唐に於きましての李義山の詩の位置と云ふものは

溫飛卿の文學（村上）

……溫庭筠段成式等と名を齊しういたしましたけれども（與太原溫庭筠、南郡段成式齊名。時號三十六體。舊唐書李商隱傳）、これは彼の徐庾と並稱されても徐孝穆は庾子山の敵に非ず、元白と並稱されても白樂天は迥かに元微之の上に在ると一般でありまして、義山の詩才は無論溫段二家の企て及ぶところではありませぬ」李義山詩講義といっている。たしかに綿密な構成、深奥な用意といった面では飛卿は到底義山に及ばないであろうが、森博士が他の所て「溫が樂府の芊綿綺合なるものに至つては玉溪（李義山の號）と雖時に或は一着を輸す」唐詩選評釋と譲つてゐるように、鮮麗な措辭、奔放な筆致は義山を凌ぐものがある。この二人の詩の傾向の相違は、義山が律詩を得意とし、飛卿は歌行に優れるという、それぞれの詩型のお好みにもはつきりあらわれている。また俗傳に義山が「獺祭魚」と呼ばれ、飛卿が「溫八叉」または「溫八吟」と稱されたところがあるが、これらのあだ名は二人の對照的な性格をよくあらわしてゐて面白い。

義山爲文、多簡閱書冊、左右鱗次、號獺祭魚。（楊文公談苑）

庭筠才思艷麗、工於小賦。每入試押官韻作賦、凡八叉手而八韻成。時號溫八叉。(唐詩紀事、北夢瑣言、全唐詩話、)

溫庭筠燭下未嘗起草。但籠袖憑几、每賦一詠一吟而已。故場中號爲溫八吟。(唐摭言)

このように義山と飛卿とはその風を異にし、一般に義山の方が高く評價されているが、いろいろな意味で長所短所を合わせて晚唐的な性格を端的にあらわしているのはむしろ飛卿ではなからうか。五代に編纂された詩選「才調集」で、飛卿が義山よりもはるかに重きをおかれているのは、當時における評價を示すものとして興味深い。

才調集は後世の選本と異なりその體裁は必ずしも整然としていないけれども、全十卷、各卷百首の中の、第六卷までの卷首に一人または二人の詩を壓倒的に多く録しているのは、その卷を代表させ一家の風を存したものと考えてよいであろう。清初の批評家、馮鈍吟(班)は「此の書の第一卷より八卷に至る、皆な一人を取りて卷を壓す、去取多く微旨あり。」(才調集評、八卷は恐らく六卷の誤まり。)といっている。その名を列擧するなら、第一卷白居易十九首、第二卷溫庭筠六十一首、第三卷韋莊六十三首、第四卷杜牧三十三首、第五卷元稹五十七首、第六卷

李白二十八首、李商隱四十首、となつており、餘の詩人は概ね數首から多いものも十數首に止まつている。韋莊が最多數を占めているのは、撰者韋穀が前蜀の監察御史であり、韋莊がこの國の宰相(吏部侍郎平章事)であつたことを考えれば必ずしもその詩に對する評價を示すものとは思えないから、これをしばらく除けば、飛卿が第二卷の卷首におかれ、六十一首を錄されているのは撰者が餘程重きをおいたものと考えてよいであろう。

飛卿はこのように晚唐の代表的詩人の一人なのであるが、彼の名が文學史の上に重きを成すのは、むしろ「詞」すなわち「詩餘」の作者としてである。唐代では西域の音樂の流入とともに音樂は飛躍的に發達し、いわゆる燕樂が大いに流行した。當時の樂曲の多くは歌辭を伴つたものと思われるが、今は偶然に記録されたものが斷片的に傳わるにすぎない。それはこれらの歌辭がなお文學と意識されることなく、またそれだけの内容をもたなかつたからであろう。

(絶句から長短句の詞が生じたという舊來の説は採らないこれについては後に詳しく論ずる。)この歌辭の體をもつて意欲的な文學的創作を試みたのは實に飛卿にはじまる。

この新しいタイプの詩は宋代にはいつて普遍的に流行し、「詞」あるいは「詩餘」として、近體古體の詩や樂府などに對立する一の文學のジャンルにまで成長するのであるが、飛卿の作品はこの宋詞隆盛の先聲をなすものである。飛卿の詞の今に存するものは、五代に編纂された「花間集」に六十六首を錄されているほか、他書に散見するものを合せて七十首ばかりで、

王國維輯「金荃集」（「唐五代二十一家詞輯」）では尊前集、草堂詩餘より各一首、飛卿詩集より二首を加えて七十首としている。龍榆生（沐勛）「唐宋名家詞選」の註によれば劉餗盤「唐五代宋遼金元名家詞集六十種」では飛卿詞七十六首を收めているというが、その本をみないので何によつてこの數を得たか明らかでない。おそらくは「金盞集」によつたものであらうが、これは疑問の多い書物である。

この數字だけをみれば決して多くはないようであるが、五代にはいつてもこれだけの量の作品を今に傳える人は殆んどいないばかりか、

王氏前掲書によれば、唯一人荆南の孫光憲八十四首がこれを越えるが、これは花間集に錄された六十首の他は全唐詩によつて

溫飛卿の文學（村上）

補っているから、疑わしいものを含むとしなければならぬ。

唐代においてはまとまつた量の詞の作品を残した人がまずないといつてよい位であることを考えれば、この數字はむしろ意外に多いものといわなければならない。このように飛卿はかなりまとまつた量の詞を残した最初の人であるが、更にその詞は當時において比肩するものがないばかりか、宋代にはいつてのちも、更には詞が音樂から離れ、純粹に讀むための文學として大いに流行するようになった清代においても、その卓絶した風格を高く評價されている。「花間集」（十卷五百首）に採録された十八家の中、最も多い六十六首をこの集の卷頭に載せられているのは、當時の飛卿の詞に對する評價を語り、實際にその風格は他の五代の詞人たちに對して群を抜いている。飛卿を除く十七家のうち、韋莊のみはやや別趣をもつが、他の多くは明らかに飛卿への模倣の跡がみえ、飛卿が「花間の鼻祖」と稱されるのは決して虚名ではない。またこの花間集という書は宋代に少くとも三種の刊本があつたことが知られているが、

紹興十八年濟陽晁謙之刊本（現在北京圖書館藏）。 淳熙十五年

鄂州刊本（王氏四印齋所刻詞本の底本）。開禧元年陸放翁跋本（直齋書錄解題所錄、毛氏詞苑英華本の底本）。

それぞれの系統をひく數種のテクストの間には所々に文字の異同があるほか、體裁内容などに混亂というべきものは全くない。これは歷代正統の文學とは認められなかつた詞の選本としては異數のことであり、

例えば、はじめ宋代に撰せられ、花間集と並んで大いに流行した「草堂詩餘」のごときは、版本ごとに體裁内容を異にし、そのどれもが原本の面目を傳えていないという。中田勇次郎「草堂詩餘の版本の研究」（大谷大學研究年報四）参照。他の例として、宋曾慥輯「樂府雅詞」は名の高い本ではあるが、鈔本として稀に傳わつていただけで、しかも直齋書錄解題で「十二卷拾遺二卷」となつてゐるのに現行の本（四部叢刊景鈔本。靜嘉堂藏鈔本も同じ。）は「三卷拾遺一卷」となつてゐる。

この書が、ひいては飛卿の詞が、あらゆる時代に（明刊本も四種が知られてゐる）詩餘の開基をなすものとして重んじられて來たことを示してゐる。清代にはいつて、さきの王漁洋は「弇州の蘇（軾）黃（庭堅）稼軒（辛棄疾）を謂いて詞の變體と爲すは是なり。溫（庭筠）韋（莊）を謂いて詞

の變體と爲すは非なり。……これを正始と謂はば則ち可、これを變體と謂はば則ち不可なり。」（弇州云云は王世貞

「藝苑卮言」のことば）花草蒙拾といい、「詞辨」の著者である周濟は「臬文曰く、飛卿の詞は深美闕約なりと。信に然り。飛卿は醞釀最も深し。故に其の言怒らず懾れず、剛柔の氣を備う。」（臬文云云は張惠言「詞選」序のことば）

といい、また「鍼縷の密なる、南宋人始めて痕迹を露わす。花間は極めて渾厚の氣象あり。飛卿の如きは則ち神理超越し、復た迹象を以て求むべからず。然も細かくこれを繹けば、正に字字脈絡あり。」介存齋論詞雜著と評してゐる。すなわち飛卿詞は、詞が充分に發達しつくした後世に至るまで、摩すべからざる高峯として評價されてゐる。詞の前驅的なすがたとして知られる中唐の張志和の「漁父詞」、白居易の「憶江南」のごときは、その素朴さを愛される底のものであるが、飛卿詞に至つては高度に洗練された技術をもつて製されており、周濟の評のごときも、個人的な好みを考慮するとしても、決して一概に退けることはできないであらう。そしてそれはさきにみたとおり、唐代では殆ん

ど孤立した存在である——いいかえるならばそれは全く突然現われる、少くともそのようにみえる。飛卿詞がなぜこのようなあらわれ方をしたか、私の飛卿文學に對する興味  
の第一はこの點にある。以下この問題を目標としつつ飛卿の文學に對し私なりの考察を加えたいと思う。

## I

飛卿の詩詞をみる前に、彼の人物、經歷について一瞥しておきたい。飛卿は李義山と同様に一生を不遇におわたつた詩人である。従つて正史新舊唐書の傳は極めて簡略であり、他の諸書の傳えるところを綜合してもその經歷は模糊としている。昨年出版された夏承禪氏「唐宋詞人年譜」所收の「溫飛卿繫年」はこれらの乏しい資料を念入りに整理してあるが、しかし明らかになつた事實が依然として極めて限られた範圍に止まるのはやむを得ない。

まず出身についてみるなら、唐書九一本傳には「溫大雅は并州祁<sup>き</sup>の人なり。……弟彥博……彥博の裔孫廷筠云云」とあり、舊唐書一九〇下文苑傳には「溫庭筠は太原の人な

溫飛卿の文學（村上）

り」となつてゐる。并州は太原の古い名であり、祁はその屬縣である。以來飛卿が「太原祁の人、彥博の裔孫」なることが通説となつており、唐才子傳、全唐詩小傳などみなこれに倣つてゐる。しかし清の歴史家趙紹祖は「世系表を案するに、廷筠廷皓を載せず（唐書宰相世系表溫氏の項に廷筠及び弟廷皓の名は載つていないの意）、舊唐書文苑傳、亦た其の彥博の裔たるを言わざるなり。」新舊唐書互證といつて彥博の裔孫なることを疑つてゐる。夏氏の「飛卿繫年」の引くところでは、顧學頤という人の説（この人には「新舊唐書溫庭筠傳訂補」及び「溫飛卿論」の著があるというがいま見ることができない。）では唐書世系表の溫氏の項に誤りが多いことなどを指摘して、これをもつて飛卿が彥博の裔孫なることを疑うことはできないとしているが、一方この人は飛卿の詩に江南における作が多く、また「江南客」、「東歸」などのことばが散見し、兩唐書の傳に「歸江東」の語があるところから、飛卿が幼時より江南に遷り、ここを故郷のように考へていたのであらうといつてゐる。彥博の裔孫なることはなお疑わしいが、飛卿自身の作品に江南

を背景としたものが多いのは事實で、このことは飛卿の文學全般のすがたに大いに影響があるように感じられる。

次に經歷の明らかなところを擧げると、

1、たびたび進士に擧げられながら結局合格しなかつた。

(「累年不第」舊唐書、「數舉進士、不中第」新唐書)

2、隨縣(湖北省)及び方城(河南省)の尉となつたことがある。(兩唐書、北夢瑣言、南部新書、全唐詩話、才子傳。但し新唐書のみは方城が方山(江蘇省)となつてゐる。)

3、徐商(新唐書一一三に傳がある)が襄陽(湖北省)の刺史となつたとき招かれてその僚屬となつた。(「徐商鎮襄陽、往依之、署爲巡官」舊唐書)この頃段成式(宰相段文昌の子、「西陽雜俎」の著者)が襄陽に退隱しており親しく交

わつた。成式の子安節(「樂府雜錄」の著者)は飛卿の女をめとつたと傳えられる。(「段成式……退隱於峴山(襄陽の南にある山)、時溫博士庭筠方謫尉隨縣、廩師徐太師商留爲從事、與成式甚相善、其以古學相遇……爲其子安節娶飛卿女」金華子。「成式……咸通初、出爲江州刺史、解印居襄陽。」舊唐書段文昌傳。なお唐書藝文志に「漢上題襟集十

卷、段成式、溫庭筠、余知古撰」とあり、直齋書錄解題には「漢上題襟集三卷、唐段成式、溫庭筠、逢皓、余知古、韋蟾、徐商等倡和詩什、往來簡牘、蓋在襄陽時也」とある。)

4、國子助教になつたことがある。(花間集に「溫助教」と題し、邢昺讀書志、唐才子傳には「終於國子助教」とある。)なお全唐文七八六に咸通七年(八六六)の日附のある飛卿の國子監勝が錄されている。これが飛卿について年代のしるされた最も遅い記録で、その終焉については、北夢瑣言、才子傳に「竟流落而卒」と誌されているだけである。

飛卿の經歷の明らかなものはほぼ以上に盡きるが、一方彼の人物、逸話を傳える記述は必ずしも少なくない。むしろ唐末、五代、宋初に著わされた隨筆筆記の類に、彼について數條をさいていないものは殆んどないくらいで、科擧の落第生であり、失意の詩人におわつた彼が、當時の文人たちの間の話題の人物であつたことが窺がわれる。以下諸書の傳えるところをまとめてみよう。

彼の文才について「溫八叉」「溫八吟」などと稱されたことはすでにしるしたとおりであるが、そのほか新唐書傳には

少くして敏悟、工みに辭章を爲る。

とあり、才子傳には

少くして敏悟天才、能く筆を走らせて萬言を成す。才情綺麗、尤も律賦に工みなり。

とされるに在る。彼の實際の作品をみても、奔放な才氣を主とし、筆に任せて句を成した跡が歴然と感ぜられる。

彼の詩の喜ぶべきはここに存し、同時に李義山が杜甫を繼ぐものと稱せられるに對し、「溫は實は李に及ばず」と許されるのもこの點に在るのであらう。

王荊公晚年亦喜義山詩、以爲唐人知學老杜而得其藩籬、惟義山一人而已。（蔡寬夫詩話）

次に彼は文學において大いに才子たるの面目を發揮しただけでなく、音樂に特別の才能をもつていたことが傳えられる。

善く琴を鼓し笛を吹く。云わく、弦有れば即ち彈じ、孔

溫飛卿の文學（村上）

有れば即ち吹く。何ぞ必ずしも鑾桐と柯亭とのみならんやと。唐才子傳、桐新。（鑾桐、柯亭はそれ／＼故事のある琴と笛の名器）

このような藝人的才能は文人の間ではむしろ輕蔑に價するものではなかつたかと思われるが、彼は得々としてこれをひけらかして遊びまわつた。

初め京師に至るや、人士翕然として推重す。然れども士行塵雜にして、邊幅を修めず、能く弦吹の音を逐い、側艷の詞を爲る。公卿無賴の子弟、裴誠、令狐滈の徒と、相い與に蒲飲し、酣醉すること終日なり。是に由りて累年第せず。舊唐書傳

彼が遊興に耽つて恥ずるところがなかつたことについては次のような記述がある。

初め將に鄉里より舉げられんとし、江淮の間に客遊す。楊子留後姚勗、厚く之に遺る。庭筠少年なり、得る所の錢帛、多く狹邪の費えと爲す。勗大いに怒り、咎うち且つ之を逐う。故を以て庭筠、卒に第に中らず。玉泉子  
咸通中、失意して江東に歸る。……既にして至り、新進



の少年と、狹邪に狂遊す。舊唐書傳

飛卿がその詩才を歌辭の製作に投じたのは、このように狹邪の巷に出入し、音樂に親しんだことが當然大きな動機となつてゐるであらう。

飛卿の人物を傳えるもう一類の記述は、彼が權貴を避けることを知らず、その憎しみを買つたことである。

宜皇微行を好む。溫に逆旅に遇う。溫、龍顏を識らず、傲然として之を詰る。

溫亦た言有り云わく、中書堂内に將軍坐すと。相國の無學を譏るなり。

令狐綯會て舊事を以て庭筠に訪う。對えて曰わく、事は南華に出ず、僻書に非ざるなり。或いは冀う、相公變理の暇に、時に宜しく古えを覽るべしと。綯益々怒り、庭筠は才有れども行無しと奏す。卒に第するを得ず。以上三條唐詩紀事、全唐詩話、才子傳、南部新書。

ここにみられるように彼が終に進士に及第できなかったのは、一つには素行の治まらなかつたことと、もう一つは貴人に憎まれたためという。投卷、溫卷によつて名を知られ、

はじめて及第することができた當時の考試では、これは當然の結果であつたらう。

唐之舉人、先籍當世顯人、以姓名達之主司、然後以所業投獻。踰數日又投、謂之溫卷。云云（雲麓漫鈔）

李義山は令狐綯の推薦によつて進士に合格し、

開成二年、高緒知貢舉。令狐綯雅善緒。獎譽甚力。故擢進士第。（舊唐書傳）

その後、王茂元、鄭亞らの幕客となつたため綯に憎まれて遂に志を得なかつたというから、飛卿と義山は同じく不遇に終つたとは云つても、その間の事情は全く違つてゐる。

次に飛卿が考試に對してはなだ不謹慎で、隣席のものを助けたりあるいは代作をしてやつたりしたことは、當時評判の話題であつたとみえて、種々の記載がある。

試に入るごとに、多く隣舖のために手を假す。唐詩紀事、全唐詩話、才子傳。

庭雲また毎歲舉場に多く舉人の爲に手を假す。沈詢侍郎舉を知し、別に鋪席を施して庭雲に授け、諸公と隣比せしめず。翌日簾前に於いて庭雲に詰いて曰く、向來名を

策せられしもの、皆是れ文賦を學士に託す。某今歲の場中に、並びに假託なからしむ。學士勉めよと。因りて之を遣る。是に由りて意を得ざるなり。北夢瑣言

山北の沈侍郎文を主<sup>つかさど</sup>るの年、特に溫飛卿を召し、簾前に於いて之を試む。飛卿の愛<sup>いと</sup>んで人を救うが爲の故なり。卒に科場を攪擾するの罪を以て、執政の爲に黜<sup>おろ</sup>貶せらる。

以上二條唐摭言

また東觀奏記には彼の代作が發覺して大いに物議をかましたことがしるされている。

初め裴諲<sup>しん</sup>上銓を兼ね、宏拔兩科を主試す。其の年、名を爭<sup>あ</sup>そう者衆<sup>おほ</sup>し。……落進士柳翰は京兆尹柳薫の子なり。

故事として宏詞科は止<sup>と</sup>だ三人のみ、翰、選中に在り。中たらざる者言<sup>い</sup>う、翰、諲の處に於て先に賦(題)を得、詞人溫飛卿に託して之を爲<sup>つく</sup>らしむ。翰既に選に中たる。

其の聲<sup>こゑ</sup>聒<sup>かく</sup>として止まず、事宸聽に徹す。

これと應じて舊唐書宣宗紀に

(大中九年)三月宏詞を試む。舉人題目を漏洩し、御史臺の劾する所と爲る。裴諲を國子祭酒に改め、郎中周敏

溫飛卿の文學(村上)

復は兩月の俸料を罰せらる。云云

とある。これら一連の記事は飛卿の人物を語るものとして極めて興味深い。

### Ⅲ

以上飛卿の人物・經歷について諸書の傳えるところを概觀したが、これを參考しつつ、彼の作品をみたいと思う。

舊唐書傳には「庭筠著述頗る多し」といい、新唐書藝文志には次の著書が擧げられている。

乾臆子三卷、採茶錄一卷、學海三十卷、握蘭集三卷、金荃集十卷、詩集五卷、漢南眞稿十卷。

このほかに前にのべた段成式らとの倡和の集として漢上題襟集十卷

が擧つてゐる。しかし直齋書錄解題陳振孫には「飛卿集七卷」とあるだけで、彼の著書の多くが早く散佚したことを思わせる。現在飛卿の文として傳わるものは乾臆子、採茶錄、靚粧錄と題する雜著の類が說郛に恐らくはその一部分を收められているほか、全唐文七八六に三十四篇(殆んど

が書啓）が録されているに止まる。詩集には普通みられるものとして次の四種がある。

溫庭筠詩集七卷別集一卷 四部叢刊景述古堂鈔本

金荃集七卷別集一卷 汲古閣五唐人集所收

溫飛卿詩集七卷別集一卷集外詩一卷 顧氏秀野草堂刊本

溫庭筠詩集七卷集外詩一卷別集一卷 席氏唐詩百名家全集所收

いずれも明末あるいは清初の本であるが、集七卷別集一卷の體裁内容はほぼ同じく、その卷數は郡齋讀書志晁公武に金荃集七卷外集一卷とあり、直齋書錄解題に飛卿集七卷とあるのと一致し、宋以來の體裁と思われる。秀野草堂本の顧嗣立跋にも

今見る所の宋刻、止だ金荃集七卷、別集一卷、金荃詞一卷のみ。

とある。集外詩一卷は顧嗣立が文苑英華、唐人萬首絶句などによつて補つたものである。いま飛卿集七卷の體裁を検するとほぼ體別となつていることがわかる。その内分けは

卷一、二 七言歌行 五十三首

卷三 五言歌行 三十七首

卷四 七律 五十七首

卷五 七絶 三十首

卷六 五言長律 六首

卷七 五言律絶 四十一首

となつてゐる。しかしこれは必ずしも嚴密でなく、卷一、二には五言のものが五首あり、卷三には七言が三首あるほか五律が數首混じられてゐる。これらの混亂を考慮に入れた上で、飛卿詩の型式について數的にいえることは

1、歌行の體が大きい部分を占める。

2、七言詩が斷然多い。

ということである。これは決して偶然的數字でなく、華麗な修辭を得意とする飛卿が、五言よりも七言を、近體よりも歌行を好んだのは當然のことといえよう。文體明辯の著者である明の徐師曾が「五言絶は眞切を尙ぶ。質多く文に勝れり。七言絶は高華を尙ぶ。文多く質に勝れり。」といつてゐるのは五絶と七絶の差違をよく表わしてゐると思ふが、飛卿集七卷を通じて五言絶句は卷七に二首を存するに

止まる。以て飛卿の性向を推すに足るであらう。

飛卿は好んで六朝官廷の故事を詠ずるが、卷頭第一篇は次の七言歌行である。

南朝天子射雉時、銀河耿耿星參差。銅壺漏斷夢初覺、寶馬塵高人未知。」魚躍連東蕩官沼、濛濛御柳懸棲鳥。紅妝萬戶鏡中春、碧樹一聲天下曉。」盤踞勢窮三百年、朱方殺氣成愁煙。彗星拂地浪連海、戰鼓渡江塵漲天。」繡龍畫雉填宮井、野火風馳燒九鼎。殿巢江燕砌生蒿、十二金人霜炯炯。」芊綿平綠臺城基、暖色春空荒古陂。寧知玉樹後庭曲、留待野棠如雪枝。」卷一雞鳴埭歌

（南朝の天子雉を射し時、銀河は耿耿たり星は參差たり。銅壺漏斷えて夢初めて覺め、寶馬塵高くして人未だ知らず。」魚は蓮東に躍りて官沼を蕩かし、濛濛たる御柳棲鳥を懸く（？））。紅妝萬戶鏡中の春、碧樹一聲天下の曉。」盤踞して勢窮まる三百年、朱方（吳の地名）の殺氣愁煙を成す。彗星は地を拂い浪は海に連なり、戰鼓は江を渡りて塵は天に漲る。」繡龍と畫雉と宮井を填ずめ、野火は風の馳りて九鼎を燒く。殿には江燕巢くい砌には蒿生

#### 溫飛卿の文學（村上）

じ、十二金人霜おきて炯炯たり。」芊綿たる平綠臺城の基、暖色春空古陂荒みたり。寧ぞ知らん玉樹後庭の曲、留まりて待つ野棠の雪の如き枝を。」

陳後主が安逸をむさぼる中に戰雲卷き起り、華かな官廷は忽ちに瓦解し、今は廢墟を留むるのみとの大意であるが、同じく陳宮を詠じた五律をみよう。

鷄鳴人艸艸、香輦出宮花。伎語細腰轉、馬嘶金面斜。早鶯隨綵仗、驚雉避凝笳。浙瀝湘風外、紅輪映曙霞。卷三 陳宮詞

（鷄鳴きて人艸艸たり、香輦は宮花より出ず。伎は語りて細腰轉じ、馬は嘶きて金面斜なり。早鶯は綵仗に隨がい、驚雉は凝笳を避く。浙瀝たる湘風の外、紅輪は曙霞に映ず。）

陳の宮廷を詠じた内容はさきの雞鳴埭歌の前二解にほぼ一致するであろうが、その人の目を驚かす動的な筆致に對し、これはわくに閉じられた窮屈な感じを免かれない。飛卿の本色はどこまでも歌行に、それも前二卷の七言歌行にあるといつて過言でないであらう。

「鷄鳴埭歌」は陳後主の悲劇的な最後を詠じたものであるが、これと趣きを同じくする作品として、隋の煬帝を歌つた「春江花月夜詞」卷二を擧げてみよう。

玉樹歌闌海雲黑、花庭忽作青蕪國、秦淮有水水無情、還向金陵漾春色。」楊家二世安九重、不御華芝嫌六龍。百幅錦帆風力滿、連天展盡金芙蓉。」珠翠丁星復明滅、龍頭劈浪哀笳發。千里涵空照水魂、萬枝破鼻飄香雪。」漏轉霞高滄海西、玻璃枕上聞天雞。蠻弦代雁曲如語、一醉昏昏天下迷。」四方傾動煙塵起、猶在濃香夢魂裏。後主荒宮有曉鶯、飛來只隔西江水。」

(玉樹の歌は闌けて海雲黒し、花庭は忽ち青蕪の國と作る。秦淮に水有り水は無情なり、還た【今なお】金陵に向つて春色を漾<sup>ただよ</sup>わす。」楊家の二世九重に安んじ、華芝を御せず六龍を嫌う。百幅の錦帆に風力滿ち、天に連なりて展へ盡くす金芙蓉。」珠翠丁星(?)復た明滅し、龍頭浪を劈きて哀笳發す。千里空を涵<sup>ひた</sup>して水魂を照し、萬枝鼻を破りて香雪を飄えす。」漏轉し霞は高し滄海の西、玻璃枕上天雞を聞く。蠻弦代雁(?)曲語るが如く、一

醉昏昏として天下に迷う。」四方傾動して煙塵起り、猶お濃香夢魂の裏<sup>うら</sup>に在り。後主の荒宮曉鶯有り、飛來し只だ隔つ西江の水。)

また當時おそらく流行の詩題であつた明皇楊貴妃の故事も彼はよく採りあげている。「題梨微寺二十二韻」卷六、「過華清宮二十二韻」卷六、「馬嵬佛寺」卷九、「華清宮和杜舍人」卷九、「華清宮二首」卷九などがある。陳後主、隋煬帝、唐明皇と並べてみると飛卿の詠史に一の偏向があることがわかる。すなわちこれらの帝王はみな享樂の末に破滅を招いた荒淫の君主で、永く世の非難を浴びているものばかりである。しかも飛卿がこれらを好んで詠じているものも少しも批判的な語氣がないのは特徴的である。他の詩人の場合は必ずしもそうでない。因みに飛卿と同時代の有名な詩人、杜牧、李商隱にも華清宮を詠じた絶句があるから、飛卿のそれと比べてみよう。

過華清宮絶句

杜牧

長安廻望繡成堆。山頂千門次第開。一騎紅塵妃子笑。無人知是荔枝來。

(長安廻望すれば繡堆を成す。山頂の千門次第に開く。  
一騎の紅塵に妃子笑う。人の是れ荔枝の來たるなるを知るなし。)

又

萬國笙歌醉太平。倚天樓殿月分明。雲中亂拍祿山舞。風過重疊下笑聲。

(萬國の笙歌太平に酔う。天に倚る樓殿に月分明なり。雲中の亂拍、祿山の舞い。風は重疊を過ぎて笑聲を下す。)

○

華清宮

李商隱

華清恩幸古無倫。猶恐蛾眉不勝人。未免被他褒女笑。只教天子暫蒙塵。

(華清の恩幸古えより倫い無し。猶お恐る蛾眉の人に勝らざるを。未だ免がれず他の褒女の笑を被むるを、只だ天子をして暫らく蒙塵せしめしのみと。)

又

朝元閣迴羽衣新。首按昭陽第一人。當日不來高處舞。可

溫飛卿の文學(村上)

能天下有胡塵。

(朝元閣廻かに羽衣新たなり。首めて按ず昭陽第一人。當日來りて高處に舞わずんば、能く天下に胡塵有らしむべけんや。)

○

華清宮二首

溫庭筠

風樹離離月稍明。九天龍氣在華清。宮門深鎖無人覺。半夜雲中羯鼓聲。

(風樹離離として月稍々明かなり。九天の龍氣華清に在り。宮門深く鎖して人の覺むる無く、半夜雲中に羯鼓の聲あり。)

天閣沈沈夜未央。碧雲仙曲舞霓裳。一聲玉笛向空盡。月滿驪山宮漏長。

(天閣沈沈として夜未だ央ばならず、碧雲仙曲に霓裳を舞う。一聲の玉笛空に向つて盡く、月は驪山に満ちて宮漏長し。)

一讀して飛卿の語氣が前の二人と異なるのを感じる。また「過華清宮二十二韻」にしても馮鈍吟はこれを評して

此の篇の着意は、只だ開元の盛時に在るのみ。祿山の亂後は便ち略す。（杜牧の）華清、（白居易の）長恨と同じからず。才調集評

といつてゐる。いま繁を避けてその末四聯のみを掲げる。

艷笑雙飛斷、香魂一哭休。早梅悲蜀道、高樹隔昭丘。朱閣重霄近、蒼崖萬古愁。至今湯殿水、嗚咽縣前流。

（艷笑雙び飛ぶこと斷え、香魂一たび哭して休む。早梅蜀道に悲しみ、高樹昭丘を隔つ。朱閣は重霄に近く、蒼崖に萬古の愁いあり。今に至るまで湯殿の水、嗚咽しつゝ縣前に流る。）

白居易長恨歌はこれと一體を爲す陳鴻の傳に「尤物を懲らす」と稱してゐる。飛卿のこの詩はこれまでに掲げた數篇の詩と同じく、むしろその華やかな生活を憧憬し、崩れ去つた美しきものを哀惜する感情だけがある。華麗なるものが没落して行くのは決してそれ自身の罪ではない、天の非情のゆえである、——そのような語氣が感じられる。そこには天の非情に對する詠嘆のみがある。彼は滴落する荷花を次のようにうたつてゐる。

三秋庭綠盡迎霜、唯有荷花守紅死。卷二懊惱曲  
（三秋に庭の綠は盡く霜を迎え、唯だ荷花の紅を守つて死するあり。）

「守紅死」の三字は飛卿のみが發し得る表現であらう。ここには飛卿詠史詩の凝縮したがたが感じられる。

飛卿はこれら一連の詠史詩と並んで、もう一つ、春景を詠ずるのが好きである。題のみをみても「春洲曲」卷二、「陽春曲」卷二、「春野行」卷二、「惜春詞」卷二、「春愁曲」卷二、「春曉曲」卷三、「春日」卷三、「春日野行」卷三、卷四、「春日偶作」卷四等があり、その他「晚歸曲」卷二、「謝公墅歌」卷二、「錢唐曲」卷二など、みな春景（それも主として江南におけるものが多い）を主題としたものである。それはこの季節の雰圍氣が彼にとつて恰好の詩題であつたからであらう。しかしこの一類の詩の境地も、彼一流の華やかな措辭に拘わらず必ずしも明るくない。いま二首を擧げてみる。

百舌問花花不語、低回似恨橫塘雨。蠶爭粉藥蝶分香、不似垂楊惜金縷。」願君留得長妖韶、莫逐東風還蕩搖。秦

女含瞬向煙月、愁紅帶露空迢迢。」卷二惜春詞

（百舌は花に問えど花語らず、低回し恨むに似たり横塘の雨。蠶の粉麝を争そい蝶の香を分かつは、垂楊の金縷を惜しむに似ず。」願わくは君留め得て長しえに妖韶ならんことを、東風を逐うて還た蕩搖する莫かれ。秦女瞬みを含みて煙月に向う、愁紅露を帯びて空しく迢迢たり。）」

敷水小橋東、娟娟照露叢。所嗟非勝地、堪恨是春風。二月艷陽節、一枝惆悵紅。定知留不住、吹落路塵中。卷七敷水小桃盛開因作

（敷水小橋の東、娟娟として露叢を照らす。嗟する所は勝地に非ず、恨むに堪えたるはこれ春風。二月艷陽の節、一枝惆悵の紅。定めて知る留めて住まらず、吹いて路塵の中に落つるを。）

このようにみてくると、飛卿のこの一類の詩が、さきに見た詠史の類と主題が全く違つていながらその根底にあるものが一であることを感ずる。そこには華麗なるものに對する限らない憧憬があり、同時にそれが亡びゆくことに對

溫飛卿の文學（村上）

する哀惜がある。類れゆく美しきものに對する咏嘆こそは飛卿の詩に繰返しうたわれる主題である。飛卿は文學に音樂に人並みすぐれた才能をもちながら、むしろその才能のゆえに不遇におわつた。狹斜の巷に狂遊し、權貴の人を譏り、舉場を擾亂するといった彼の奇行を傳える一連の物語りの中には、彼の不運な境遇の中に培かれた絶望的な心情が感じられる。飛卿の詩全般にみられる徹底した耽美主義と、そこにつきまとう鋭敏な無常感とは、この絶望的な心情と表裏をなすものであらう。そしてその中に私は晚唐という時代を感じる。飛卿が晚唐を最もよく代表する詩人であるとはじめにのべたが、それは外面的な修辭などについてのみいうのではない。飛卿詩のもつ類廢的、絶望的な氛圍氣が、晚唐という時代の精神を象徴しているようにおもわれるからである。

#### IV

前節では、飛卿が好んで作り、またその特徴を最もよく發揮しているのは詠史詩と傷春の詩であることを指摘し、



その根底にある精神が一であることを述べたが、この二類を比べると、その手法には全く異なるものがある。歌行という體は大抵何等かの物語りの要素をもっているのが普通で、飛卿の歴史を詠ずる歌行はいかにもその要素を備えている。ところが春景を詠じた一類の作品ではこの點で全く違つてくる。そこには具體的な筋といふべきものは殆んどなく、ただ春の溫雅な繁圍氣とそれをいとおしむ感情のみが一篇の詩の中に構成される。このように具體的な事गराを通さずに語句の點綴によつて直接的に繁圍氣、感情を構成するという手法は、飛卿の詩餘についてもそのままいえることである。さきに中唐の張志和・白居易らに詩餘の前驅的なものがあることをのべたが、いま實際の作品を飛卿の詞と比べてみよう。

憶江南

白居易

江南憶、最憶是杭州。山寺月中尋桂子，郡亭枕上看潮頭。  
何日更重遊。

(江南の憶<sup>おも</sup>いて、最も憶わるるは是れ杭州。山寺の月中に桂子を尋ね、郡亭の枕上に潮頭を看る。何れの日にか

更に重ねて遊ばん。)

夢江南

溫庭筠

千萬恨，恨極在天涯。山月不知心裏事，水風空落眼前花。  
搖曳碧雲斜。

(千萬の恨み、恨みは極まりて天の涯に在り。山月は知らず心裏の事、水風に空しく落つ眼前の花。搖曳として碧雲斜めなり。)

飛卿の詞には表現の上に格段の技巧があり、すでに詩餘的な獨特の繁圍氣がある。しかし夢江南という體は形も單純であるし、民歌的な匂いが強く、飛卿詞もこの體ではなお素朴な味わいを留めている。飛卿の詞を白居易らのものと隔絶させ、獨特の境地を展開しているのは、やはり花間集の卷頭に掲げられて長く諷誦されて來た菩薩蠻十四首と更漏子六首であらう。今その一首ずつを挙げる。

菩薩蠻

玉樓明月長相憶，柳絲裊娜春無力。門外草萋萋，送君聞馬嘶。  
畫羅金翡翠，香燭銷成淚。花落子規啼，綠窓殘夢迷。

(玉樓明月長く相い憶う、柳絲曼娜として春力無し。門外に草萋萋たり、君を送りて馬の嘶くを聞く。畫羅金翡翠、香燭銷けて涙を成す。花は落ち子規は啼き、綠窓に殘夢迷う。)

#### 更漏子

星斗稀、鍾鼓歇、簾外曉鶯殘月。蘭露重、柳風斜、滿庭堆落花。虛閣上、倚欄望、還似去年惆悵。春欲暮、思無窮、舊歡如夢中。

(星斗は稀れに、鍾鼓は歇みて、簾の外に曉の鶯殘れる月。蘭の露は重く、柳の風は斜めに、滿庭に落花堆たかし。虚しき閣の上に、欄に倚りて望めば、還た似たり去年の惆悵たるに。春暮れなんと欲し、思ひは窮まりなく、舊歡は夢中の如し。)

そこには細膩にして幽遠な一の感覺的境地が構成されるだけで、具體的な情景、場面といったものは讀むものの想像にまかせられる。その陶醉的な氛圍氣は形をもたないために無限の擴がりをもつ。張皋文が「飛卿の詞は深美閎約なり」といい、周濟が「蘊釀最も深し」、「神理超越し、復

#### 溫飛卿の文學(村上)

た迹象を以て求むべからず」といつているのは、このところをいうのであろう。この短かい詩が、かみしめて盡きない味わいを持ち、繰返し誦して倦きないのはまさにこの點にある。そこでは飛卿が歌行の中にすでに示していた手法が、變化に富んだ新しい詩型を得て十二分に發揮され、從來の詩の中にみられなかつた創造的な世界を展開している。この菩薩蠻や更漏子は句に長短の變化があるだけでなく、平仄、押韻、粘法などに近體詩とは隔絶した複雑な律がある。八叉手して八韻を成した飛卿は、型式が複雑になればなるほど意欲を馳られて雕琢を凝らしたに違いない。飛卿の歌行にはその手法において詩餘に通ずるものがあることをのべたが、そのできばえに格段の相違があるのは、詩餘の變化に富んだ型式が飛卿の手法にふさわしいということもあるが、一つには飛卿の意欲の注ぎ方に差があつたためであらう。

飛卿の歌行には詩餘に通ずるものがあることを示す一つの證左をあげておこう。明清の間に大いに流行した詞の選本「草堂詩餘」には飛卿の玉樓春一首が録されている

(四印齋本では上卷)。しかしこの一首は花間集などにはみえず、實は飛卿詩集卷三にあり、七言八句の玉樓春と體を同じくするために詞と誤まれたものである。いまその辭をしるす。

家臨長信往來道、乳燕雙々拂煙草。油壁車輕金轡肥、流蘇帳曉春雞早。籠中嬌鳥暖猶睡、簾外落花閑不掃。衰桃一樹近前池、似惜紅顏鏡中老。卷三春曉曲

(家は長信【宮殿の名】往來の道に臨む、乳燕雙々として煙草を拂う。油壁の車は輕くして金轡肥え、流蘇の帳は曉となりて春雞早し。籠中の嬌鳥暖かくして猶お睡み、簾外の落花閑かにして掃わず。衰桃一樹前池に近く、紅顏の鏡中に老ゆるを惜しむに似たり。)

現行の飛卿詩集は詩餘を收めない原則であるし、この詩は「才調集」にも採られて「齊梁體」と注が附されており、これが元來は詞として作られたものでないことは明らかで、草堂詩餘がこれを收めているのはその粗雑さを示しているのであるが、興味深いことにこの詩は草堂詩餘の中に在つて少しも奇異に感じられず、迂闊にみたのではこれが誤ま

つて收録されたものであるとは決して氣がつかないであらう。試みに草堂詩餘の同じ卷にある同じ調の詞を一首擧げてみよう。

玉樓春

宋子京(祁)

東城漸覺風光好、皺縠波紋迎客棹。綠楊煙外曉雲輕、紅杏枝頭春意鬧。浮生長恨歡娛少、肯愛千金輕一笑。爲君持酒勸斜陽、且向花間留晚照。

(東城漸く覺ゆ風光の好きを、皺縠の【ことき】波紋客棹を迎う。綠楊煙外曉雲輕く、紅杏枝頭春意鬧し。浮生長恨ありて歡娛少なし、千金を愛んで一笑を輕んずるを肯んぜんや。君が爲めに酒を持して斜陽に勸め、且らく花間に向つて晚照を留めん。)

前の飛卿詩と比べてその境地に殆んど懸隔を感じないであらう。飛卿の歌行にはすでに詩餘的要素が多分に含まれてゐることがわかる。

次に飛卿によつてにわかに文學の世界に無視できない地步を占めることになつたこの新しい詩型の發生について考えてみよう。舊來の通説によれば、六朝、隋の樂府は唐代

に入つて歌唱の傳承を絶ち、初盛唐の間には専ら絶句が歌われ、中晩唐に至つてこれが次第に變じて長短句の詞となつたとされている。この考え方は宋人の説く所にはじまつており、

西漢時、今之所謂古樂府者漸興、晉魏爲盛。隋氏取漢以來樂器歌章古調、併入清樂、餘波至李唐始絶。唐中葉雖有古樂府、而播在聲律則渺矣。士大夫作者、不過以詩一體自名耳。（碧雞漫志）

唐初歌辭、多是五言詩、或七言詩、初無長短句。自中葉以後至五代、漸變成長短句、及本朝則盡爲此體。（茗溪漁隱叢話後集）

絶句から長短句への變化を説明するものとしては、泛聲（うたの間にはさむあいのて）のところに實字を入れることに端を發するという朱熹の説が最も有力なものとしてされている。

古樂府只是詩、中間却添許多泛聲。後來人怕失了那泛聲、逐一聲添箇實字、遂成長短句、今曲子便是。（朱子語類一四〇）

以後數百年間、詞源を説くものは殆んどみなこれらにもとずいて説を爲しており、方成培（香研居詞麈）、宋翔鳳（樂

溫飛卿の文學（村上）

府餘論）ら清朝の詞評家をはじめ、近時においても青木正兒（支那文藝論叢、支那文學概説）、胡適（詞的起源）清華學報一の二）豐田穰（唐代における詞の起源について）漢學會雜誌六の二）各氏など、みな論證の途徑に差異があつても、その主旨はかわらない。しかし音樂が未曾有の發達をしたという盛唐において、絶句のような單純な形のもののしか歌われなかつたというのは極めて奇異に感じられるし、さきに舉げた菩薩蠻、更漏子をはじめ花間詞の大部分はすでに絶句から變化したとは思えない複雑な型式を備えており、この説を疑わせるに充分である。昨年刊行された任二北氏の「敦煌曲初探」中國戲曲理論叢書は敦煌文書にみえる五百數十首の歌辭の研究であるが、その中に長短句歌辭が早くから存することを説いているのは注目すべきである。任氏の説く所を簡単に舉げると、

(1)、樂府詩集四四—五一清商曲辭は隋の清樂の歌辭及び唐人の擬作を收録しておりこの中には長短句のものが少なくない。王灼（碧雞漫志の著者）らがこれを唐代に入つて全く歌われなくなつたというのは根據がなく、新舊唐書の音樂

志にはともに唐代に入つて清樂六十三曲が存したことが明記されている。敦煌曲の中には明らかにこれを承けるものがある。

(2)、樂府詩集七九—八二近代曲辭は唐代の歌辭を録したもので、その大部分が絶句であり、唐代の歌辭が絶句であつたとする説の重要な論據となつている（例えば胡適「詞的起源」が、これは編者郭茂倩が故意に長短句詞を除外したもので、唐代歌辭の實態を傳えるものではない。

(3)、更に決定的な證據は、開元天寶の間の人、崔令欽の著した「教坊記」に三百四十二の曲名があがつているが、敦煌曲及び花間詞の曲名の多くはすでにその中にみえる。花間詞の作者は晚唐五代の人であり、敦煌曲は作られた時期の明らかでないものが多いが、その樂曲が盛唐以來のものであることは儼とした事實である。

任氏の説は舊來の絶句變じて長短句詞生ずの説を否定し、歌辭には常に齊言の體と雜言の體とが並び存することを説いて盡しているのであるが、ここにおいて文學としての詞の成立ということに對して從來とは全く別の説明が加えら

れなくてはならないであろう。從來は盛唐のころに絶句が歌われたことのみが傳わつたために、そのころの歌辭がすべて絶句であつたかの如く考えられたが、これと並行して、文學とは意識されない、従つて記録される機會をもたなかつた多くの歌辭があつたことが考えられなくてはならない。敦煌から發見された曲子詞はこれを實證したものといつてよいであろう。舊來の説によれば、晚唐に至つてはじめて詩餘の體が備わつたので飛卿のごとき作家が生れたと説明されるが、いまはそのような考え方が成立しないことが明らかとなつた。百歩を譲つて長短句詞が晚唐にはじまるとしても、飛卿と同じ時代に彼と比肩する詞の作者がいないことは依然として理解できないであろう。

冒頭に提出した飛卿の詞が突然出現するという事實はいかに説明さるべきであろうか、この種の歌辭の體式が早くから備わつていたのになぜ長い間單なる歌謡の辭に留まつて後世に傳うべき文學が生れなかつたか。それは一つにはこれら無名の歌謡作者たちの間からすぐれた詩人が生まれなかつたからであり、これは當時音樂に従事する人々が、

文學的な素養からは遠い存在であつたから當然のこととい

えよう。他の一つは、飛卿に先んずる、また飛卿と同時代の詩人たちが、この體を以て積極的に文學を創作しようとしなかつたからであり、この理由が考えられなくてはなるまい。それには何よりもまず「文は以て道を載す」という意識、つまり儒教的精神の一部として「文」というものを神聖視する意識が考えられるであらう。「能く弦吹の音を逐い、側艷の詞を爲る」ことが、飛卿が世に重んじられなかつた理由として舊唐書の傳には書いてある。歌曲の辭は畢竟遊藝の文字であり、君子たるものの意を注ぐべきところではないからである。詞をつくることが文人たちの間にやや一般化して來た五代になつても、晋の宰相和凝が若い時に好んで曲子詞を作つてひろめたが、宰相になるに及んであわててこれを回收して焼き捨てたという有名な話がある。

晋相和凝少年時、好爲曲子詞、布於汴洛。泊入相、事託人焚毀不暇。然相國厚重有德、終爲艷詞玷之。契丹入夷門、號爲曲子相公。所謂好事不出門、惡事行千里。士君子得不戒之乎。(北

溫飛卿の文學(村上)

夢瑣言)

そのご詩餘は宋代において、またずっと下つて清朝において、その洗練された感覺的な美しさを愛されて文人の間に流行するのであるが、儒教的精神が中國を支配している間、道德的見地からこれをさげすむことはついに變らなかつた。四庫提要詞曲類の冒頭には次の如くのべている。

詞曲二體は、文章と技藝の間に在り、厥の品類卑しく、作者貴ならず。特だ才華の士の綺語を以て相い高うするのみ。

従つて最初にここに手をつけるためには、この傳統的意識を排除する餘程のエネルギーがなければならぬ。飛卿の詩才と音楽の才能とは彼が詞を生み出した不可缺の條件であつたろうけれども、このような才能において彼に匹敵するものが全くなかつたとは考えられず、これだけで彼の詞の出現を説明することはできない。

文というものに對する傳統的意識を排除して、歌曲の辭に意欲的な詩作を試みるには、晩唐という頹廢的な時代は恰好の環境であつたろうし、これが普及するために五代と

いう混亂の時期が適當であつたように思われる。しかし、晩唐という時代においても、飛卿という人物がここに先鞭をつけたのは、決して偶然のこととは思えない。彼の人柄を傳える記述の中に感じとられる、そして何よりも彼の詩詞の中にあふれている彼の絶望的な心情と、徹底した耽美主義とが、ここでは既成の道德的意識を排除して、創造的文學を生み出すエネルギーとして働いていると私は考へる。また彼はこのような精神の持主であるために一生志を得なかつたのであり、彼が詩餘の開祖であることと一生不遇におつたことは、決して別々のことではない。また彼が晩唐という頽廢の時代を代表する詩人であると同時に、次の時代の新しい文學の先聲を爲しているという矛盾も、このように考へてはじめて理解できるのであらう。